



愛成会は女性のみの施設入所支援を長年行っており、敷地内で建物を行き来しながら生活とお仕事をしています。はじめて全作品を視聴した方がいたり、作品の感想を個別に聞き取りしたり、作品内容により踏み込んだトライアルになりました。

〔施設種別〕

施設入所支援/生活介護事業/就労移行事業/短期入所事業

〔利用者数〕

定員60名(施設入所支援)

〔立地〕

〒164-0001 東京都中野区中野5-26-18

〔運営〕

社会福祉法人愛成会



青木信

高校卒業後、身体障害者施設での生活支援員や有料老人ホームでの生活相談員を経て、2019年より社会福祉法人愛成会 指定障害者支援施設メイプルガーデンに入職。生活介護(日中活動)を担当。委託業務(公園の清掃、カレンダーの梱包作業等)や、レクリエーション(カラオケ、調理等)をおこなう。個性豊かな利用者さん達と過ごす中で、共に楽しんだり、刺激されたり、充実した日々を過ごしています。



玉村明日香

大学時代に美術史を学んだことがきっかけで、アール・ブリュットや障害者の芸術活動に関心を持ち、2018年より社会福祉法人愛成会に入職。障害者の芸術文化活動の普及支援に取り組む拠点「東京アール・ブリュットサポートセンター Rights (ライツ) / 現 東京アートサポートセンター Rights (ライツ) [2022年4月改名]」の運営を通じて、美術や舞台芸術などの分野における研修やワークショップ、イベントの企画・運営を行ってきました。

事前施設リサーチ (Zoomでの遠隔施設ツアー)



コロナの影響で、日中活動の場所の使い方が大きく変わりました。グループ単位でローテーションで各部屋を使い、1グループは生活棟の共用スペースで活動するようになりました。

—— (青木)



室内にはイベントや行事でつくられたものが少しだけ飾られていますが、個人の持ち物などは少ないです。なるべく物を減らしてすっきりとした状態を維持しているそうです。

—— (山川)



ロッカーのある共用スペースにはテレビがかけられています。音楽を聞いたり映像を見るときには人気なのは、松田聖子など80年代のアイドルソングなど。利用者さんの平均年齢が高いため、他の施設とは人気のコンテンツが違っていました。

—— (山川)



地域にも開かれたお祭りで使われている庭のスペース。生活棟の食事をとるリビングから見えるようになっています。コロナでお祭りをやらなくなつてからはあまり使われることが少ないそうです。屋外上映会のアイデアも出てきました。

—— (山川)

056

事前施設リサーチ (Zoomでの遠隔施設ツアー)



生活棟の共用スペース。本棚やソファがあり、大勢いても自分の好きな場所で過ごすことができます。パーティーをした際の飾りが天井に残っています。

—— (山川)



文房具や材料などはロッカーに納められて整頓されています。共用スペースには介助用ベッドも複数台設置されています。

—— (青木)



ピアノとカラオケマシーンがあります。音楽が好きな人は多く、「愛成音頭」や「365歩のマーチ」は思わず体が動いてしまうそう。

—— (山川)



落ち着いて過ごしたい人のために個室スペースが用意されています。壁はスケジュールを書いた紙が貼られていたり、毎日壁紙を少しづつ剥がした跡が大きくなつた場所があります。

—— (青木)

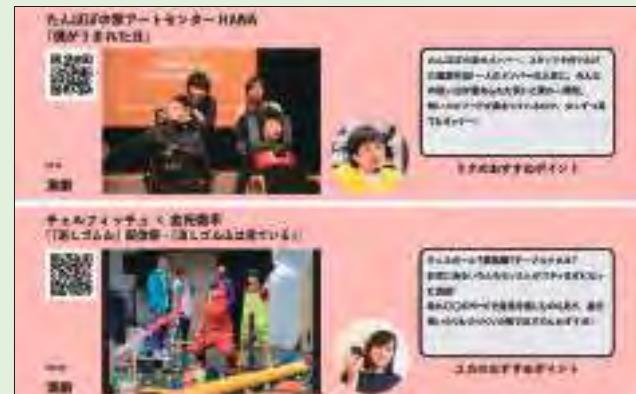
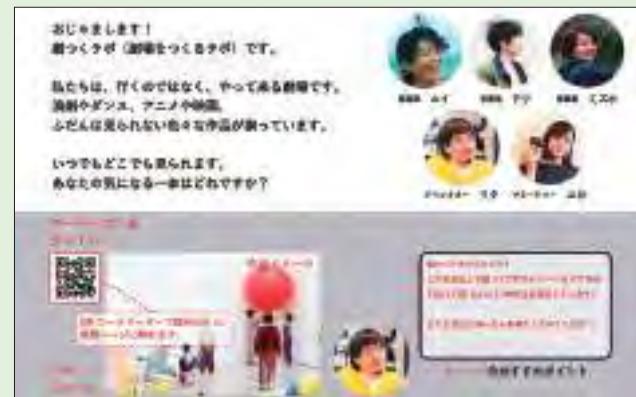
057

トライアルのアイデア

各スケッチやコメントはクリエイターから
施設へ提案したときの情報をそのまま掲載しています。

カタログ

ぬか つくるとこで、利用者さん・スタッフともに作品選びのヒントになる情報が欲しいというフィードバックが、またメイプルガーデンからは人好きな利用者が喜ぶので顔が見たいということで、愛成会でのトライアルからは作品カタログに顔写真つきのおすすめコメントを追加しました。施設の誰もがはじめてのものを感じむききっかけになり、以降の施設でも毎回作成しています。



トライアルのアイデア

カタログ

<p>レディシア・カートン 「グランサンへの手紙」</p> <p>おしゃべり音楽にこだわった手紙。おしゃべりしたて初めての手紙。絵本読み聞かせアドバイザリーや絵本読み手がいる手紙。</p> <p>QRコード 映像</p> <p>チラシのおすすめポイント</p>	<p>ライスエド・ガシエント 「Inches」</p> <p>カラフルな色彩で丸い形を描いています。おしゃべりの音楽を歌う歌詞が載っています。お絵かきの手紙「手紙」の絵本が載っています。歌詞と一緒に歌って「Inches」という歌詞の読み方を覚えて歌を歌ってください。</p> <p>QRコード 映像</p> <p>チラシのおすすめポイント</p>
<p>和田屋、「ホトトギスの歌」オヤツを詠み歌うよ!! ～歌詞～」</p> <p>和田屋の「ホトトギスの歌」歌詞を詠んでいます。歌詞に合わせて歌を歌ってください。歌詞に合わせて歌を歌ってください。歌詞に合わせて歌を歌ってください。歌詞に合わせて歌を歌ってください。</p> <p>QRコード 映像</p> <p>チラシのおすすめポイント</p>	<p>高橋義記「豊島原町祭典歌舞 （ひらめ）一聲歌」</p> <p>豊島原町の伝統文化、豊島原町コントンカラーランスが豊島原町祭典にて開催されます。歌詞は豊島原町の歌詞を歌ってください。歌詞は豊島原町の歌詞を歌ってください。歌詞は豊島原町の歌詞を歌ってください。</p> <p>QRコード 映像</p> <p>チラシのおすすめポイント</p>
<p>高橋義記「四方十 いのちの仕舞」</p> <p>高橋義記の「四方十 いのちの仕舞」。歌詞は豊島原町アドバイザリーやお絵かき手が載っています。お絵かき手が載っています。お絵かき手が載っています。お絵かき手が載っています。</p> <p>QRコード 映像</p> <p>チラシのおすすめポイント</p>	<p>吉川義久「アカマツのハクビラ」</p> <p>吉川義久の「アカマツのハクビラ」。歌詞は豊島原町アドバイザリーやお絵かき手が載っています。歌詞は豊島原町アドバイザリーやお絵かき手が載っています。歌詞は豊島原町アドバイザリーやお絵かき手が載っています。</p> <p>QRコード 映像</p> <p>チラシのおすすめポイント</p>

アイデア

お試しキットを用いて全作品を鑑賞した利用者さんがいたことから、空間的なアイデアはシンプルにまとめ、作品鑑賞と感想の聞き取りを中心に実施しました。鑑賞している人を起点にしたコミュニケーションが起きやすいよう上映場所を選んでいます。



A

Kさんにもっと観てほしい案



B

誰かが気づくかもしれない案



特等席で一緒に見てみる案(向かいの棟)

C

060

A

Kさんにもっと観てほしい案

すでに多数の作品を観ているKさんに、ピンクレディーの映像を観るときと同じように、共用のモニターで観てもらう。ネックスピーカーあるいはスピーカーで音が周りに聞こえる状態で見てもらい、Kさんきっかけでコミュニケーションが起きることに期待。



テープレコーダーでKさんに感想を吹き込んでもらうことができないかお願いしました。利用者さんの直接のリアクション（短くてもうまくしゃべれなくてもOK）が今回は貴重だと思っています。



誰かが見ていると、それに釣られてやってくる人がいます。ひとりとふたりではまた様子も変わってきます。観ている姿が他の人にも見えることで、普段とは違うコミュニケーションが生まれるかもしれません。

[利用機材]

ネックピロースピーカー

ネックスピーカー

モニター

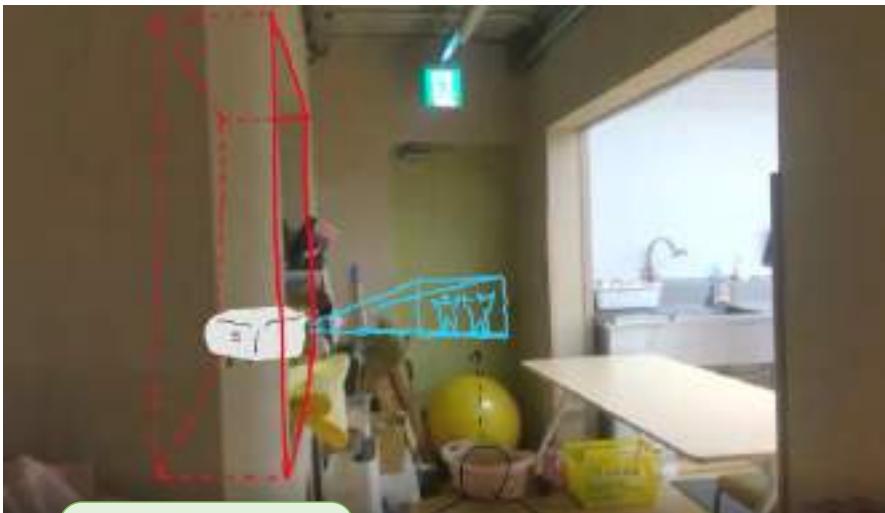


061

B 誰かが気づくかもしれない案

ぬか つくるとこでは小さなタブレットを展示作品にまぎれるように壁にかけておきました。見る人もいれば見ない人もいたり。さりげなく映像があることで、1回観てみて飽きたっかりではなく、また出会うかもしれない可能性をつくります。

1階の奥の暗がりに、チームで選んだおすすめ5本の映像をループで流します。ピアノを弾いたり、この廊下スペースが好きな方が興味を持ってくれるか。ほかの利用者さんも音が気になって少し見てくれるか。じっくり観るというより、ちょっと観てちょっとやめる、を繰り返すとどう変わっていくかを見てみたいと考えた案です。



段ボール等で目隠しつくる
かは要現場検討。その場
でカバーを製作か?

【利用機材】
小型プロジェクター



【再生方法】
DVDでループ予定

C 特等席で一緒に見てみる案

2-3人がよく座っているソファに一緒に抱きかかえられる丸太スピーカーを設置します。一緒に音と映像を楽しめるようにして、レイアウトも入れ替えることで部屋全体からモニターが見やすいよう模様替えします。3人組にテープレコーダーでインタビューをしてみても良いかもしれません。

丸太スピーカーやソファのまわりにはなんとなく人が集まります。リラックスした雰囲気は、他の人の活動を刺激せず、ふだんと違ったことを試せるようです。



丸太スピーカーをソファに設
置して、クッションとしても利
用できるようにします。

【利用機材】
丸太スピーカー



モニター



トライアル&フィードバック



青木

KさんはTFAに強い興味を示して全作品を見ていました。気に入った作品は繰り返し見て、スタッフに感想を伝えてくれるように。集中して見るのにはヘッドフォンが一番良かったようです。



青木

視聴している人が集中して見られるようにしたかったのと、まわりの人が気になりすぎないようパーティションで区切ったスペースを設けました。完全な個室だとスタッフの目が届かなくなってしまうので、これくらいのスペースが良いです。



青木

Kさんはお気に入り作品のうち『鍾馗』では一緒に歌を歌ったり、音を鳴らして鑑賞していました。『僕がうまれた日』を見て、私も（演劇を）やってみたい、という感想も。



青木

Kさんのお気に入り作品を中心に共用スペースのテレビでも視聴してもらいました。ひとりが見ていると他の人も集まってきて一緒に見てくれました。ヘッドフォンのような集中はできませんが、周りの人とおしゃべりしながら見て楽しそうでした。



図版 C-1

青木

廊下で投影していることをあえて教えずに流しておきました。音に気付いた利用者さんが自分で椅子を動かしてひとりでずっと見ていました。誘い合わせたわけではないのに、3人が並んでみているときもありました。



山川



元々は右のマットレスで寝ている方がこの廊下で過ごしていたそうで、彼女がどんなアクションをするのか気になり試したアイデアが廊下での上映でした。普段はアニメをよく見るそうですが、この投影がされている間は廊下で過ごすことはなかったそうです。

青木

生活棟ではタブレットを中心に見てもらいました。ひとりが見はじめると他の方も近づいてきて並んで見ていました。

板坂

タブレットを置く自作の支持台がとてもかわいいです。機材だけだとそっけないのが、何に置かれているか・飾られているかで印象が大きく変わったと思いました。



図版 C-5



図版 C-7



山川
うしろにモニターがあるのに小さいタブレットで見ている様子が不思議な感じがします。タブレットはひとりで観るものと想定していましたが、画面というより物を囲む感じが、複数人で体験を共有するのに合っているようです。

写真に映らなかったこんな出来事も...



青木

(Kさんの視聴について)作品の内容を完全に理解している訳ではないですが、音楽に合わせて歌う・手拍子を打つ・独語を話す・セリフを真似る様子がみられました。鑑賞後は必ず感想を伝えて下さり『四万十 いのちの仕舞い』も何度も鑑賞しており、「おばあちゃんが寝てた」「私は健康だから大丈夫だね」と話していました。「鍾馗」も気に入って、お囃子の音が楽しかったようです。1日に1回は「シアター見たい」と訴えがあり、返却前には「悲しい」と泣いていました。



青木

声出しが多く、日頃から室内を歩き回っている利用者のOさんと、トライアル機材を使用し、声出しに変化が生じるかモニタリングをおこないました。大きな声を出していた最中に、ヘッドフォン使用し目の前で映像を流すと、ピタッと声出しが止まりました。5分経過すると声出しは再開しましたが、しばらく座って過ごし時々画面を眺めていました。

愛成会 メイプルガーデン 施設スタッフ振り返り

文=青木信

突然現れた見たことのない機材。ほとんどの利用者さんがiPadに触れるのははじめてだったと思います。これはなんだ?何か楽しい事が始まるのか?とワクワクしている様子が伝わりました。

『僕が生まれた日』を試聴したKさんは、車椅子に乗った演者を見て「私と一緒に、車椅子」「私もこれ(演劇)できるかな?」「職員さん(車椅子)押してくれる?」と演劇への興味が生まれ、何度も観聴していました。

モニタリング終了後、カセットテープで録音しながらMさんに感想をお聞きした時の出来事。「ハロー〇〇(自己紹介)」と繰り返しお話しするMさん。普段話さないので何で英語なんだろう?と不思議に思いました。よく聞いてみると『THEATRE for ALL』と言う言葉や飛行機が出てくる作品を見て海外を連想したからだったのです。

以上のエピソードは一部ではありますが、THEATRE for ALLという新しい活動を通して、利用者さんの興味や引き出しを発見する事ができました。今後の活動で演劇を取り入れてみたり、英語を使った言葉遊びをするなど、新しい発見から利用者さんの楽しみにつなげていきたいと思いました。

愛成会 メイプルガーデン 施設スタッフ振り返り

文=玉村明日香

当法人は、障害のある人たちの芸術活動をさまざまなかたちでサポートする「東京アール・ブリュットサポートセンター Rights (ライツ)/現 東京アートサポートセンター Rights (ライツ)[2022年4月改名]」を運営しています。この窓口にお問合せをいただいたことがきっかけで、入所施設もある事業所「メイプルガーデン」がプロジェクトに参加することになりました。

~~~~~

ライツの運営に携わっていた当時、障害者の芸術活動に触れる機会は多くありましたが、誰もが鑑賞を楽しめる場が生まれていく過程に立ち会えること、多分野の人からその環境づくりのヒントを学べることに新たなワクワクとドキドキがありました。そして、一緒に参加をした利用者の方々や職員はとても身近な存在でしたが、今回のプロジェクトでの体験を通じて新たな一面に出会うことができたり、コミュニケーションが生まれたり、何より日常生活や活動の中に豊かな時間が加わったようでした。日常を過ごしている場でも視点を変え新しい環境をつくることで、生まれる出会いや発見があることを改めて実感しています。同じ空間のなかに共有できるものが増えることで、支援をする・されるの枠を超えてお互いに刺激を受ける時間になりました。

## 愛成会 メイプルガーデン クリエイター振り返り

文=梅原徹

愛成会でのトライアルは現地への視察と設置ができた唯一の機会でした。施設としても規模が大きく、オペレーションの難易度が高かったため、青木さんと玉村さんからのフィードバックがデザインをする上での中心的な要素となりました。タブレットの持台をつくってくださったり、パーテーションを設置していただいたり、場のデザインに積極的に参入していただきながら、作品に対する利用者さんの声や、機材環境による状況の変化を事細かに報告していただきました。

~~~~~

カセットテープを用いた録音のアイデアも愛成会トライアルのなかで生まれたものです。オンラインをベースとしたトライアルで「動的な現場のアーカイヴをどう残すか」は大きな課題でしたが、おふたりの柔軟な対応と数々のアイデアによってそれを可能にすることことができました。

~~~~~

メイプルガーデンには大きな中庭があり、空間的なポテンシャルがまだまだ秘められています。都内というアクセシビリティを用い、将来的には地域に開かれた上映会などの実施も検討できそうです。

## やまなみ工房

〔トライアル期間〕  
2021年11月

〔担当〕  
小西康文/桐葉朋子/桐葉昌大



070

やまなみ工房はさまざまな種類の建物が立ち並び、建物ごとにキャラクターの異なる創作と生活空間が広がっています。各建物を巡るようにトライアルをはじめました。やまなみ工房からの提案で挑戦的なトライアルを予定していましたが、コロナの影響でお試しキットでのトライアルまでおこないました。

〔施設種別〕  
多機能型事業所(就労継続B型・生活介護)  
〔利用者数〕  
25名(就労継続支援B型)、定員55名(生活介護)  
〔立地〕  
〒520-3321 滋賀県甲賀市甲南町葛木872  
〔運営〕  
社会福祉法人やまなみ会

やまなみ工房は滋賀県甲賀市甲南町にあり、現在障害のある約90名の方たちが通所されています。ここでは一人ひとりが好きなこと、やりたいことなど、ありのままを表現し、日々個性あふれるさまざまな作品が生まれています。作品は国内外の様々な展覧会への出展やドキュメンタリー映画、ファッション、グッズなど多種多様なプロジェクト、幅広いアートワークを展開し、社会に発信しています。



小西康文 支援員、2017年よりやまなみ工房所属。



桐葉朋子 支援員、2008年よりやまなみ工房所属。



桐葉昌大 支援員、2014年よりやまなみ工房所属。

071

## 事前施設リサーチ (Zoomでの遠隔施設ツアー)



アートセンターは各階ごとにアトリエの様子が大きく異なります。このフロアは大きな机がぐるりと輪になって置かれていて、それぞれのスペースに制作中の作品がたくさん並びます。賑やかな部屋です。大きな作品をつくる人には座敷のようなスペースも用意されていました。——(山川)



こちらのフロアでは小さい壁のついた机を一人ひとり使っています。ここは静かな空間が好きな人のフロアなので、音楽を聞くときはイヤホンやヘッドフォンで聞くそうです。

——(山川)

## 事前施設リサーチ (Zoomでの遠隔施設ツアー)



「ころぼっくるルーム」は木造の小さな平屋のアトリエです。カラフルな部屋には所狭しと作品や道具が置かれています。各建物は利用するメンバーが決まっていて、建物間の移動は多くないそうです。タブレットを普段から使う人もいます。

——(小西)



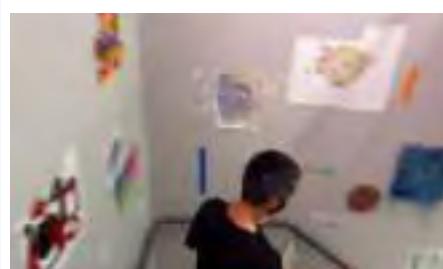
本館の入口にはディスプレイスペースがあり、定期的に飾られる作品が変わらうそうです。飾られている自分の作品を気にする人はあまりいないそうで、どちらかというと来客のための展示になっているようです。

——(山川)



最上階にはもともとスクリーン、スピーカーがあり、イベント利用するだけでなく、本が置かれた図書室のようなスペースにもなっています。所長室もあり、利用者さんのなかには所長に会いにやってくる人もいます。

——(小西)



ピンク色の照明の階段にはたくさんの作品がかかっています。この階段を通って、自分の机のある部屋へ利用者さんは毎日あがっていきます。

——(小西)



「こっとんルーム」は女性だけの創作スペースです。モニターを使ってテレビを見ることがあります。希望を出す人と相談しながら何を見るかを決めています。タブレットは人気で取り合いになってしまないのでここには置いていません。

——(小西)



ギャラリースペースは外から来た人も訪れることが多い場所です。床がヒンヤリして気持ちいいのか、ここでよく寝て過ごしている利用者さんがいます。

——(小西)

# トライアルのアイデア

## お試しキットの フィードバック

写真を1枚ずつじっくり眺めながらどんな状況だったのかを教えてもらいました。一人ひとりのプロフィールも知りながら観察していくことで、状況が起きるプロセスまで考えることができました。



# トライアルのアイデア

## 機材の確認

全建物に大型のモニターやプロジェクタースクリーンが設けられており、オリンピックをみんなで観戦することもあるそうです。映像視聴やみんなで共有することが日常的に起きているため、これらの型番と合わせて場所の状況を把握していきました。

い  
こつこんR  
機材 東芝/モニター  
形名 50M500X

ろ  
アートセンター 4F  
機材 スクリーン  
縦210cm×横360cm

は  
食堂  
機材 スクリーン  
縦210cm×横275cm

に  
ころぼっくるR  
機材 SIRIUS/モニター  
形名 TLD-PR220BK

ほ  
本館 展示ホール  
機材 シャープ/モニター  
形名 LC-52DS6

へ  
本館 ぶれR  
機材 シャープ/モニター  
形名 LC-52DS6

と  
本館 たゆR  
機材 シャープ/モニター  
形名 LC-50W30

## トライアル&amp;フィードバック



小西

普段は良く動かれる利用者の方ですが、ネックピロースピーカーに興味を持ったようで、ゆっくりと見ながら過ごしているこの状態がとても新鮮でした。見ていたのはいつも見ているアンパンマンでした。



図版D-2



小西

普段からタブレットを見る時間を食事の後と帰る前に設けています。普段はベッドに座って見ているのですが、ネックピロースピーカーだったからかこの日は横になってタブレットを使っていました。



桐葉昌

普段からタブレットを使っているのですが、お試しキットのボードに取り付けたまま使っていました。ワイヤレスのネックスピーカーを使っているときは音だけ聞いていました。ひとり掛けの椅子が座り心地が良いようでリラックスしています。



図版D-3

## トライアル&amp;フィードバック



桐葉昌

自宅でパソコンを使っている人たちで、機材に興味を持って集まってきたようです。流れていた音が大きかつたわけではありません。なぜかスタンディングです。



図版D-4



山川

やまみ工房にイベントで製作した屋台があったのでお試しキットを搭載してもらいました。これでいくつかのアトリエを巡回してもらいました。



図版D-5



桐葉昌

普段から歌うことが多い方で、ネックピロースピーカーから音が出ていることを面白がっていました。普段からタブレットでYoutubeを流してみんなでカラオケをしたりしています。



図版D-6



桐葉朋

普段はホールでテレビを見ていますが興味を持っていたようなので促して使ってみてもらいました。片手が動かしづらい方なので、寝転がってみたらと提案したら長い間こうして見ていました。ネックピロースピーカーが気になる人が多かったです。



小西

今まで定期的に上映会をしたり、月1でお楽しみの映画会を開催していましたが、コロナの影響で行えなくなってしまいました。何を観るかより、誰とどうすごしてどう楽しむかが大事なので、誘い方をいつも考えています。この日は『○+□+△=動き・巡り×映画』から見はじめましたがシュールでみんなポカンとしていたので、『さかさまのバテマ』『エレクトロニコス・ファンタスティコス』に切り替えました。



図版D-7



小西

この方は食堂で上映するときは必ずこうして近くで見ています。理由はわかりませんが、なぜか近くで観るのがお好きなようです。



渡辺

#### 全作品視聴マラソン

メイプルガーデンで全作品を観た利用者さんがいたという話を聞いて、やまなみ工房から提案してもらいました。利用者さんとスタッフさんがペアになり、一緒に全作品を見て感想やリアクションを共有していくきます。未知なものに素直に反応していくことを、スタッフが利用者さんから学ぶ機会にしたいと提案してもらいました。



小西

#### 送迎バス上映会

ふだんは飽きたり嫌だったら離れることができますが、送迎バスではそれと向き合わなければいけなくなります。一人ひとりがしたいように、という施設方針だからこそ、つまらないと思ったり飽きてしまうリアクションも含めてしっかり観察して話してみたい、というやまなみ工房からの提案です。

## やまなみ工房 施設スタッフ振り返り

文=小西康文

今回、劇場をつくるラボのお試しキットを体験する機会をいただき、利用者の方々の新たな興味や反応を発見することができました。やまなみ工房では、普段からタブレットを見たり、プロジェクターで映画等を鑑賞する行事を実施していたので、はたして興味を示してくれるだろうか……という心配もありましたが、屋台にさまざまな機材を並べて出してみると、僕らスタッフが説明するまでもなく、自分たちから興味を示していました。機材を触ったり、さっそく使われる利用者の方々を見て、改めて新しいもの、はじめてのものを取り入れることは、新たな興味や可能性、楽しみへと繋がっていくだと感じました。使われる機材はスピーカーが中心で、枕型のスピーカーを使って寝転んで好きな動画を見たり、スピーカーから音が出てくること自体を楽しめたり、本来の用途と違う使い方をされる方もいましたが、それらも含めてそんな風に楽しむ方法もあるんだと気づくことも多かったです。

今回のお試しキットの体験で、こちらが想定した反応とまったく想像していなかった反応が入り混じり、いい意味で裏切られた結果を知ることができました。やまなみ工房では一人ひとりの好きなことが自由に表現できる場であることを大切にしていますが、表現の可能性を広げていくためにも、今回のプロジェクトのように、さまざまな体験を持てる機会を今後もたくさんつくっていきたいと思いました。

# やまみ工房 クリエイター振り返り

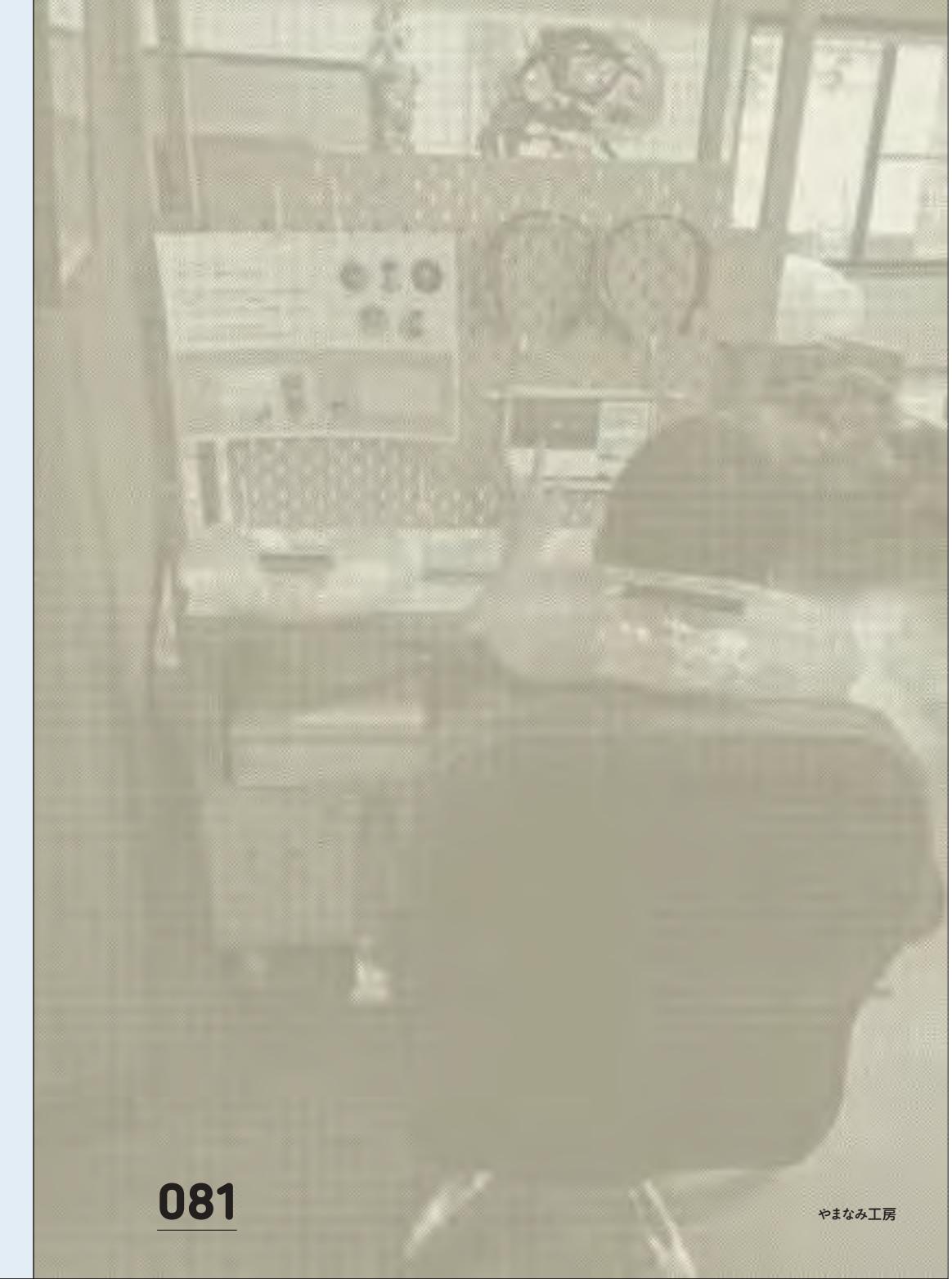
2

文=渡辺瑞帆

やまみ工房さんは、元々モニターが設置されている部屋やシアタールームがあり、上映会にも慣れていて、普段からデバイスを使い慣れている方が多くおられる印象でした。現地にお伺いすることは叶わなかったのですが、zoomの館内ツアーで館内を案内していただきました。毎日同じ音楽をかけ続けている人、お気に入りのスポットがある人など、場所ごとに利用者さんのお話を聞けたことで、とても具体的な空間のイメージを共有いただきました。その際にご相談した場所や設置方法でお試しキットを使っていただき、写真を見ながらzoomでどんな様子だったか伺ったのですが、利用者さんそれぞれの背景や興味等と合わせてお話をいただいたことで、日常的にそばにいらっしゃるスタッフさんの目線そのものを映し取るような体験となりました。



トライアルについては、「送迎中の時間を鑑賞時間にすることができるのではないか」「スタッフと2人1組で全作品観てみるのはどうか」など、館長から素晴らしいアイデアをいただきました。図面から読み取れること以上に、普段の時間と空間の隙間から、プラットフォームと掛け合わせた時の可能性を引き出していただいたように思います。



# ピーボ/ はじまりの 美術館

〔トライアル期間〕  
2021年11月－2022年2月

〔担当〕  
折笠弘海/小林竜也/佐藤雅俊



082



**あさか**  
安積愛育園は福島県内にさまざまな施設を持つ社会福祉法人です。創作活動の発表の場であるはじまりの美術館を窓口に、法人内からピーボがトライアルに加わってくれました。同時期に開催されていた展覧会と連動しながら、他施設と比べて長い期間のトライアルをおこないました。

**多機能支援センター** 〔施設種別〕

**ピーボ** 生活介護事業所

〔利用者数〕

定員30名

〔立地〕

〒969-1205 福島県本宮市和田戸ノ内321

**はじまりの美術館** 〔施設種別〕

美術館

〔立地〕

〒969-3122 福島県耶麻郡猪苗代町新町4873



佐藤雅俊

多機能支援センター ピーボ管理者、生活支援員。2006年に入社し、2021年より現職。創作活動を支援するプロジェクト「unico(ウニコ)」やunico作品のアーカイブ事業にも携わる。



折笠弘海

多機能支援センター「ピーボ」生活支援員。社会福祉法人「安積愛育園」入社後、障がい者入所施設「あさかあすなろ荘」、入所支援事業所「アルバ」の生活支援員を経て、現職。創作活動を支援するプロジェクト「unico(ウニコ)」に創設時より携わっている初期メンバー。



小林竜也

はじまりの美術館・企画運営担当。1984年、栃木県生まれ。会社員、飲食業などを経て、2012年に福島県猪苗代町へ移住。2014年に社会福祉法人安積愛育園に入社後、現職。

083

# 事前施設リサーチ (Zoomでの遠隔施設ツアー)



ピーボはどの部屋も自然光がしっかりと入り常時明るい施設です。どこで過ごすかは利用者さんの自由になっています。ベンチや土間などのボケットスペースが多く、様々な過ごし方ができます。身体を動かしづらい人のための畳敷きの静養室も設けられています。

—— (山川)



ホールは天井が高く、印象的なデザインの照明が吊られています。ロフトは普段ほとんど利用しないそうで、プロジェクターの投影スペースになりました。ホールで椅子を並べて上映会をしたことがありますが、段々人が抜けていきました。

—— (折笠)



大きな窓があるので、ホールは特に明るくなっています。ホール利用のグループはある程度決まっていますが、人数や曜日によって多少変わります。コロナ以前は各部屋で食事を取っていましたが、ホールも使って分散するようになりました。

—— (折笠)



落ち着いて過ごしたい人のためにパーティションで区切られたスペースをホールの一角に設けています。

—— (山川)

**084**

# 事前施設リサーチ (Zoomでの遠隔施設ツアー)



左手のトイレの隣にベンチスペースがあります。廊下も広いので、部屋ではなくこちらで過ごす人もいるそうです。

—— (山川)



エントランスすぐにギャラリースペースがあります。利用者の作品が展示されていますが、作品を見に来る人はあまりいないそうです。

—— (山川)



静養室は畳敷で、ここで1日を過ごす利用者さんもいます。壁にテレビがついていますが、基本は天井をずっと見上げることになるので、もっと色々な刺激を与えられたらいいなと思っています。

—— (佐藤)



はじまりの美術館のカフェ、ショップ部分は地域の人々がよく訪れます。スタッフたちの事務仕事もカフェでおこなっているので、話しかけられることもよくあります。築140年の蔵を改修しているので、天井には古い木の梁が見えていて、展示室も同様の空間が続きます。

—— (小林)

**085**

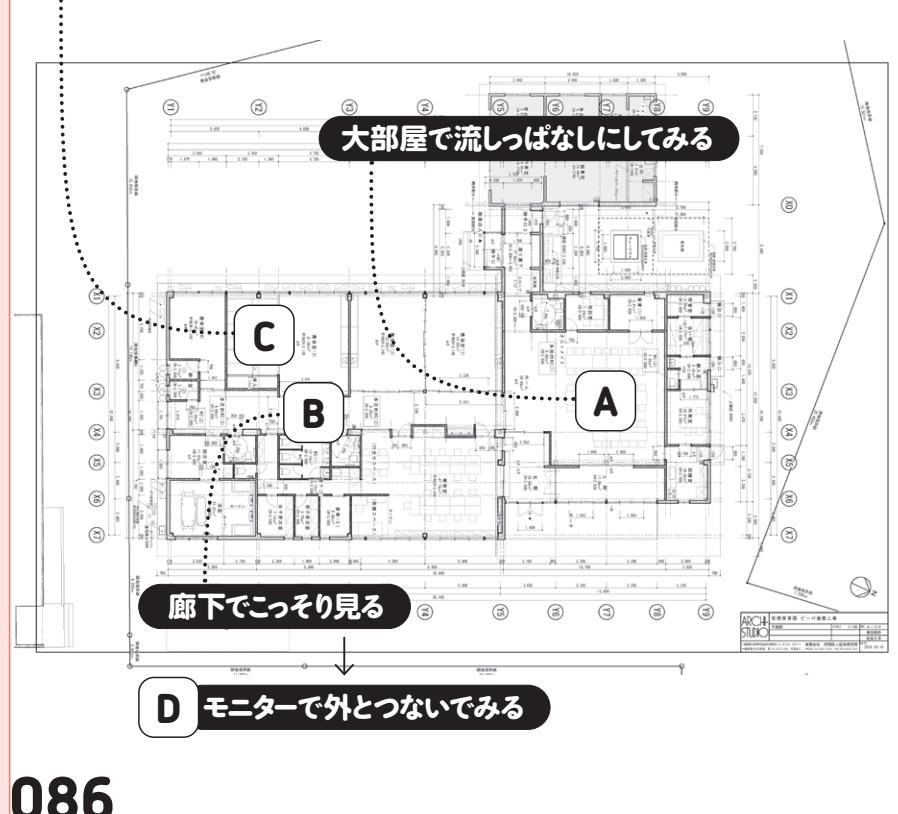
# トライアルのアイデア

各スケッチやコメントはクリエイターから  
施設へ提案したときの情報をそのまま掲載しています。

## アイデア

利用者さんがコロナ禍以降はリモートでラテンパーカッションのレッスンを受けていると聞き、作品鑑賞だけでなくはじまりの美術館のオンラインツアーを企画しました。トライアル期間を他施設より長くすることで、利用者さんやスタッフの変化を段階的に観察できる計画になりました。

## 天井に投影してごろごろ眺める

**A****大部屋で流しっぱなしにしてみる**

一方、椅子をしっかりと並べるのは違う上映会も試せるのではないかと思います。

ホールは壁も大きく、いままでもサンバの稽古で使われていることから、上映会を試してみたいですね。ロフトにプロジェクターを常設して、向いの壁に大きく投影するのはいかがでしょうか。

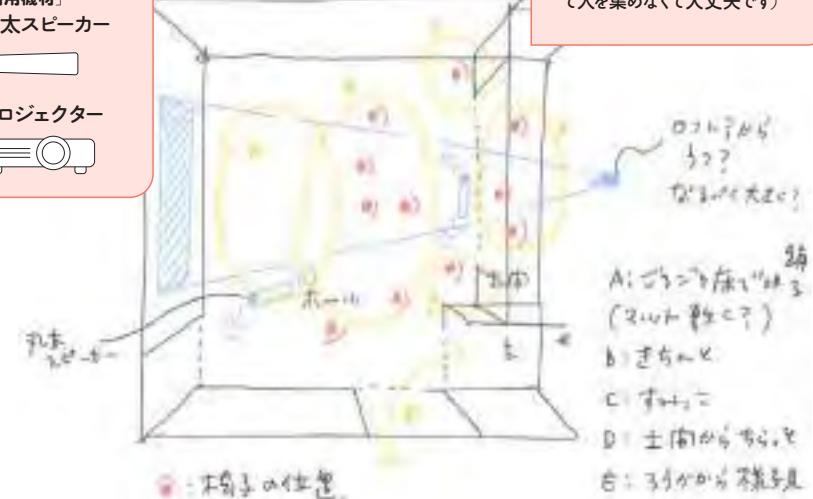
日時を決めて定期的に作品を流しっぱなしにしてください。(上映会のように声かけして人を集めなくて大丈夫です)

## 【利用機材】

丸太スピーカー



プロジェクター

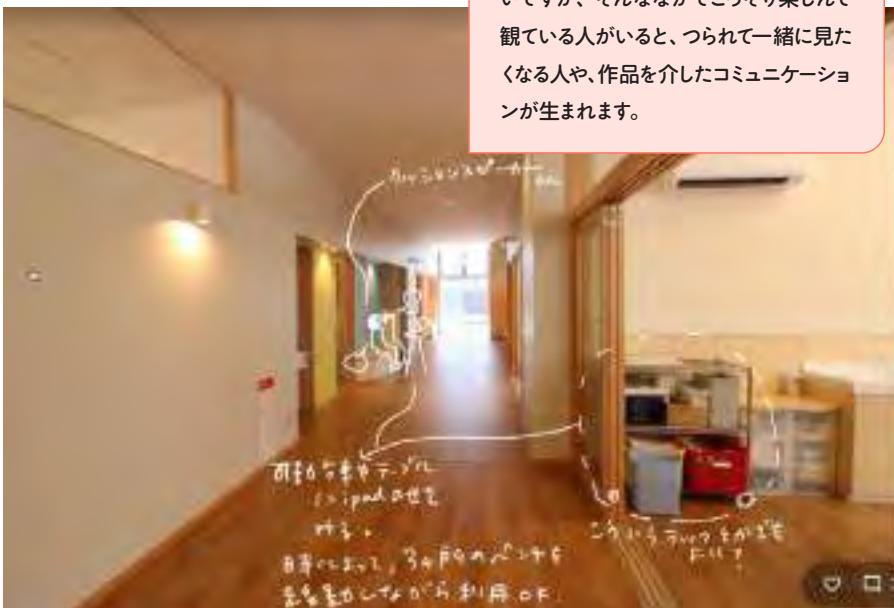


## 【セトリリスト】

|                                        |                                       |                   |                                      |                                          |
|----------------------------------------|---------------------------------------|-------------------|--------------------------------------|------------------------------------------|
|                                        |                                       |                   |                                      |                                          |
| 「僕がうまれた日」<br>たんぽばの家<br>アーツセンター<br>HANA | 落語ミュージカル<br>「お菊の皿」<br>金原亭世之介<br>&RAGG | ももたろうのつづき<br>範宙遊泳 | SHOKI-鍾馗-<br>藤田善男×<br>益田市石見<br>神楽神和会 | True Colors<br>FASHION<br>ドキュメンタリー<br>映像 |
| —<br>演劇・57分                            | —<br>落語・56分                           | —<br>演劇・31分       | —<br>ダンス・63分                         | —<br>ドキュメンタリー<br>84分                     |

**B 廊下でこっそりみる**

廊下は人も行き交うので交流が起きやすいですが、そんななかでこっそり楽しんで観ている人がいると、つられて一緒に見なくなる人や、作品を介したコミュニケーションが生まれます。



【利用機材】  
ネックスピーカー



ネックピロースピーカー



タブレット



タブレットを設置するためのスタンドをお送りします。  
1台(送付済):ピックアップしたアニメ作品の上映  
1台(今回送付):はじまりの美術館とのZoom接続  
(今回送付のタブレットにZoomをインストールしてあります。)

【セッリスト】



Twins in Bakery  
宮澤真理  
アニメ5分



Waltz  
宮澤真理  
アニメ14分



もるめたも  
Reframe Lab  
アニメ8分

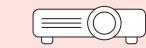
**C 天井に投影してごろごろしてみる**

プロジェクターを縦向きにして、天井投影した映像を眺めます。丸太スピーカーと、ネックピロースピーカーの利用で、より身体に近いところで音を感じられます。

【参考】@ぬか つくるとこ



【利用機材】  
ネックピロースピーカー 丸太スピーカー プロジェクター



【セッリスト】

映像を観なくても楽しめる落語からはじまって、視覚に特化したバージョンの「イマージュ」、手話演劇の『サバクウミ』、聴覚に特化したバージョンの「イマージュ」、詩と静かな映像の『I/O』、そして五感を動員する「イマージュ」、と使う感覚をゆるやかに変化していくセッリストです。



落語ミュージカル  
「お菊の皿」



没入型映像  
「イマージュ」  
(視覚化)



『サバクウミ』



『I/O』



没入型映像  
「イマージュ」  
(オリジナル)

**D****モニターで外とつないでみる**

普段は美術館をただ中継しておいて、不定期で小林さんや来訪者の方のオンラインツアーを開催しましょう！（どこかの回で山川もお邪魔したいです）

ライブで中継される外の場所があることで、ほかの映像作品の意味合いも変り、また新しいコミュニケーションが生まれそうです。



【利用機材】  
タブレット



折笠

ネックピロースピーカーをうまく使えない人が多かったですが、こちらの利用者さんはとても気に入ってよく使っていた。普段は言葉ではなくうなずいたり首を振ったりでコミュニケーションしていて、通いはじめたころよりあまりお話しない印象を持っていました。松田聖子が好きなことは知っていたが、このセットを使ってはじめて歌っているのを見ました。



佐藤

車いす利用の方で、普段から人通りの多いこの場所で過ごしていることが多いです。横になっているのでミッキーの枕を用意していますが、外してしまうことが多く、この日はタブレットを置いていました。電車の映像が好きで、楽しみながら眠っていました。



佐藤

電車の映像の、特に音が好きなようです。丸太スピーカーにいちばん興味を持っていた利用者さんです。音が出てくるところを見て嬉しそうにしていました。普段からビニル袋を触り続けていて、丸太スピーカーの振動も楽しんでいたので、感触も彼には大事なのかもしれません。



折笠

プリキュアを選んでよくパズルをされている方です。『風になりたい』が好きだと聞いていたのでネックピロースピーカーで聞いてもらったら嬉しそうに聞いていました。施設ではひとりで楽しむという時間を持つことが難しいので、こうした機材は喜ばれるようです。





佐藤

ほとんどの時間を畳の静養室で過ごしている方です。普段はスタッフとテレビを見て過ごすことが多いですが、壁掛けのディスプレイでは見づらいので、周りに声をかけてもらうのが一番の刺激になっていました。天井に映像を映し、隣に丸太スピーカーを置いて過ごしてもらって、普段は見られない表情を少し見ることができました。



図版E-5



図版E-6

折笠

ホールでのボールペンのキャップを切り放す作業中に『桃太郎』を流してみました。音が気になってしまふ人は個室で作業をしていたので、ここで過ごす人々はたまに映像を見ながら作業をされていました。



佐藤

プロジェクターを設置するためにロフトにあがる様子を見て利用者さんが盛り上がってきました。普段人があがっているのを見かけない場所だったので、準備の様子 자체が面白かったようです。



図版E-7



佐藤

ホールに誰もいないけど遠くから離れて映像を見ています。普段から2kgくらいのたくさんの持ち物を背負って過ごしている方で、フィルムの入っていないカメラで撮影の真似をよくしています。



図版E-8



山川

なにかを撮影するような距離感で対象を眺めているのかもしれないと思いました。



図版E-9



図版E-10



山川

#### Zoomオンラインツアー

自分の作品がどのように展示されているかを見る機会は多くないそうです。オンラインで普段からラテンパーカッションのレッスンを受けており、Zoom越しのコミュニケーションも慣れていることから、ビーポのみんなではじまりの美術館の様子と一緒に見るオンラインツアーを開催しました。自分の作品を他の人が観ている様子を見られることは利用者さんにとって嬉しいことのようでした。同じ法人内とはいえふたつの場所は気候も異なるそうで、はじまりの美術館の外の積雪を見て歓声があがっていました。

# ビー／はじまりの美術館

## 施設スタッフ振り返り

1

文=佐藤雅俊

はじめは、事業所としてもイメージがぼんやりとしていたところからのスタートではありました。山川さんたちとの打ち合わせのなかでさまざまなアイデアをいただき、イメージを膨らますことができました。実際のトライアルのなかで、特にふたつのことが印象に残っています。

ひとつ目は、音響など準備をしている段階で利用者さんからの反応がすでにあったこと。「日常」にない何かがはじまる予感を感じて興味を示してくれている行動がそこに表れていたように思います。ふたつ目は、職員の行動。職員全体として今回の企画を共有しても、いまいちイメージがしにくい、どのように利用者さんに提供していいのか分からぬといった感情が職員の中にもあったと思いますが、それは新しい事に対する「不安」だったかもしれません。準備の段階では、「どのように提供すればいいですか?」という言葉から、活動の中に浸透していくにつれ、「今日もやっていいですか?」と言葉が変わっていきました。これは、利用者さん、職員ともにプラスのエネルギーになっていることを実感した瞬間でもありました。

また、はじまりの美術館の展覧会をZOOMで巡った時間は、利用者さん、職員ともにとても笑顔で笑い声も上がるとても充実した時間でした。

今後の事業所の活動において、「感覚」で楽しめるこの活動を摸索し、利用者さんが楽しんでもらえる瞬間をもっと増やしていけばと思います。

094

# ビー／はじまりの美術館

## 施設スタッフ振り返り

2

文=小林竜也

「基本寝たきりの方がいて、1日中天井を見つめることが多いので何か出来ないかなと思ってたんです」。

「劇場をつくるラボ」のトライアルに向けたオンラインミーティングで、ビー／の佐藤さん、折笠さんからそんな利用者の方の話がでて、「それなら天井に作品を投影しましょう!」と山川さんが提案し、少しづつ実施方法が固まっていきました。そんなやりとりだけでも、この企画に参加してみてよかったです。また、ちょうどはじまりの美術館で開催していた公募展にビー／メンバーの作品も展示されていましたが、コロナや雪の影響で見に行けないという話も出ました。そこでも、オンラインでつなぐことでギャラリートークを見る環境をつくることができ、今後も法人内で活用できそうな手応えを感じました。

すべてが手探りで、「劇場でない場所でもパフォーミングアーツを楽しむ」というTHEATRE for ALLの本来の目的までは手が届かなかったようにも思いますが、まだ見ぬものに出会うという試みにはなったのかなと思います。それはまさにラボでした。

095

# ビーボ/はじまりの美術館 クリエイター振り返り

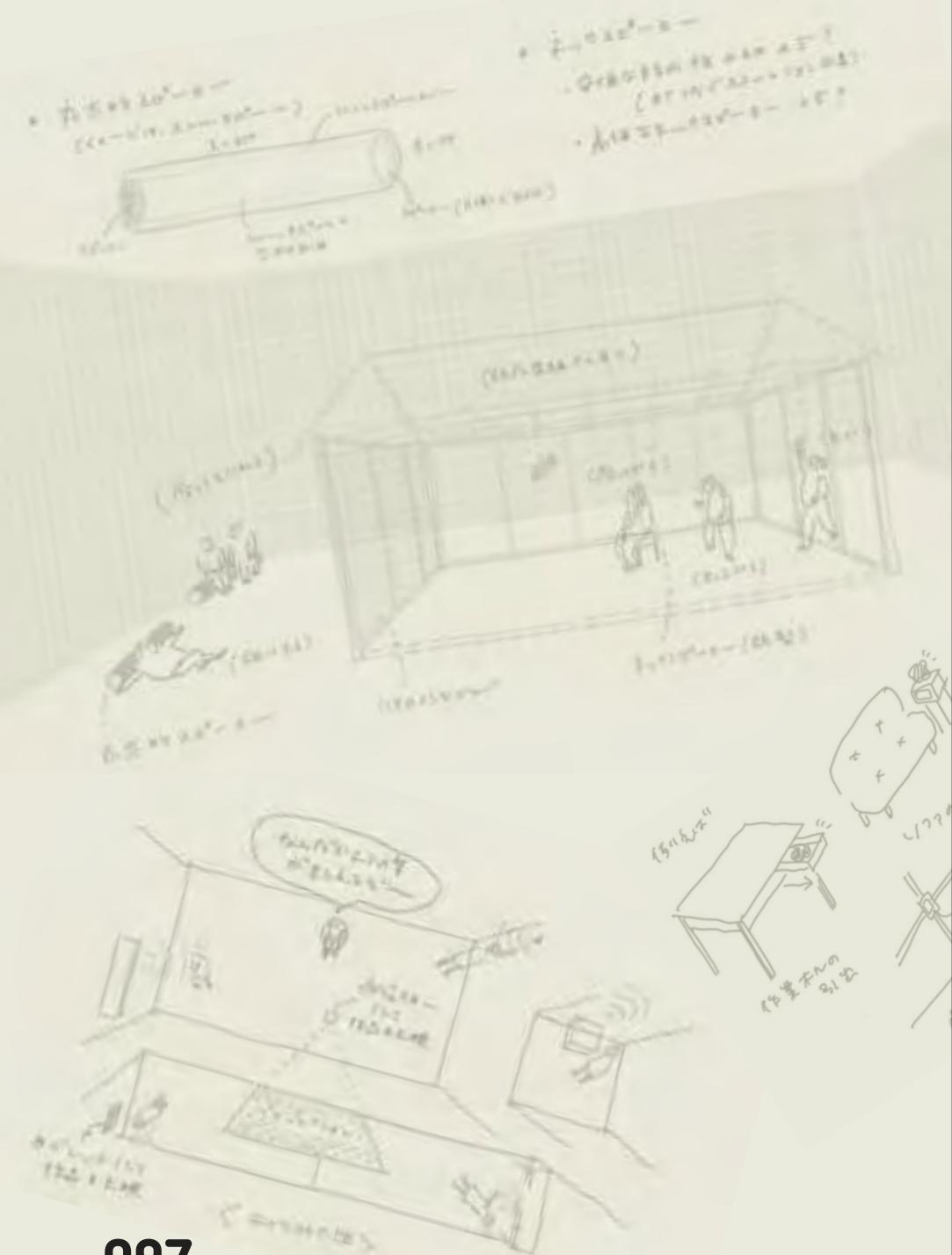
3

文=山川陸

なんとなく近いと思っていたふたつの拠点——ビーボとはじまりの美術館が、車で1時間は離れていると知って驚きました。施設の取り組みを教えて頂く話のなかで聞くと、その距離感がよくわかります。そして創作の発表場所でもあるはじまりの美術館へ、ビーボの利用者さんがあまり行けないことを教えてもらい、Zoomで2拠点をつなぐバーチャルツアーガが生まれました。

いまここではない場所に出会うという機能は、中継される映像も、作品も同様です。視聴するものをいわゆる作品に限らないことで、むしろ映像作品が私たちに何をもたらしているのかがわかりました。

作品鑑賞のアイデアから多くの発見がありましたが、このツアーの最中、自分の作品が展示されている様子をほかの方と喜んで見ていた利用者さんの姿が印象的です。そして、小林さんが窓の外の雪を映したときの利用者さんの盛り上がりも。同じ施設でもこの1時間の距離で、気候が大きく変わるんだそうです。「劇場をつくる」とは、なかに閉じられた場所をつくることではなく、外とつながっていくための場所づくりなのかもしれません。



# 経験を積み重ねて 感覚を共有する

文=板坂留五

「劇場をつくるラボ」として活動しておおよそ1年と数ヶ月が経ったが、実感としては、2年以上取り組んでいるように思えるほど、思考があっちへいったりこっちへいったりと道のりの長い活動だった。

~~~~~

今回のような実験的な取り組みをする際には、最初に仮説を立てる。自分たちの経験から、おそらく目標はあのあたりで、そのためにはこういう段階があるだろう、そしてこの段階ではこんな風にして、この辺りで振り返りかな、といったように。ほとんどの場合は、その都度おこなわれる振り返りにおいて仮説が大きく変わったりすることなく、微調整によってまとまっていく。

ところが今回は、施設ごとにフィードバックをして次の施設についての計画に向かう度に、「そもそも劇場ってなんなんだ?」とチームが共有しているはずの認識について議論をしていたよう思う。仮説よりも前段階にある、土台のつくり直しをしていたのだろう。土台のつくり直しといっても、前あったものを覆すのではなく、ちょっと横にスライドしたり、縁を広げてみたり、土台を広げたり増やしていくようなイメージだ。例えば劇場は何人いれば成立するのか。ひとりでじっくりと作品と向き合う場合もあれば、複数人いて語り合う場合もあり、3人程度の顔見知り同士のティータイムのような場合もある。状況が違えば、劇場のかたちはいかにも変わる。

~~~~~

そしてまた、それが「パターン」ではなく「一例」に過ぎないことを身をもって感じた。訪れた福祉施設は、メンバーそれぞれはもちろん、空間の設えから地域環境、そこで働くスタッフの出自も大き

く異なっていて、トライアルを重ねるたびに「福祉施設」というフレームが私のなかでばらされていった。そして、この多様な環境の延長上に、私が東京で猫と暮らすアパートの1室もあるのではないかと感じている。

はじめは、「劇つくキット（機材とその使い方などがまとめられたセット）」をつくろう!と意気込んでいたが、途中で「お試しキット」という視聴に慣れてもらうソフト面での仕組みをつくり、1度フィードバックをもらう方法を考えた。またハード面では、Zoomツアーをしながら、施工できそうな部屋の仕様をチェックし、それをリスト化して診断書をつくろうというアイデアがあった。このようにして、トライアル施設に対しクリエイターチームから一方的に「パターン」を当てはめるのではなく、相互に確認を取り合いながら「一例」として取り扱いながら、その都度方法をブラッシュアップしていくという漸進的な姿勢で取り組んだ。

~~~~~

1年と数ヶ月をかけて、このような小さな積み重ねを共にしてきたことによって、クリエイターチームのなかに共通の認識のようなものが生まれはじめているような気がしている。はっきりとしたパターンや言葉にはまだなっていないが、「良い!」という感覚は一致していたり、「なんだかおかしいぞ」というときに他の人を見ると少し険しい顔をしていたり、何か共有されているものがありそうだ。この感覚をより多くの人に共有できるよう、範囲を少しづつ広げていくと良いのかもしれない。

「それぞれの劇場」にある即興 2

文=梅原徹

この1年間、施設ごとに内容はまったく異なりますが、「劇場を考えるための場」を打ち立てることができたと思っています。

~~~~~  
劇場をつくるラボでは、映像を鑑賞するという前提のもと、「参加者それぞれの知覚を互いに想像し、共有・共生していく」という大きな課題にチーム全体で取り組んでいます。私はこの他者の知覚を想像してみることに従来のシアター的な上映形式にはない魅力が秘められていると感じています。

また劇場をつくるラボはTHEATRE for ALLにアーカイブされた映像作品のアウトプットをデザインする役割を担いながら、「作品内容に対する理解」と「上映される状況」にヒエラルキーを設けないという姿勢を一貫していることが最大の特徴です。この1年は個々の施設に対する空間的なリサーチや職員へのヒアリングをベースに、一つひとつの映像作品の特性を最大化する方針で機材の選定やプロジェクション位置の検討をおこなってきました。トライアルの後半にかけてラボの設計言語のようなものが少しづつ確立され、空間の使い方や映像のセレクションに共通の認識が浮かび上がっていたと思います。視聴覚機材を選ぶことができるのもポイントのひとつで、高品質な機材を正しいポジションで使用することと、機械自体の使い方を利用者に委ねることの両方が成立することを目指しました。実際にネックスピーカーを腕につけている方や、LとRを逆にして楽しんでいる方もいて、その状況をラボとして観測できたこと自体が、他者の知覚を想像することへとダイレクトに繋がっていました。

今後の取り組みとしては、上映されている状況を最大化するような場の設計についてより深い実践をおこないたいです。もしくは最大化のための映像作品をラボメンバーでつくってしまうというアプローチも面白いのではないかと感じています。例えばたんぽぽの家のトライアル時に制作した丸太スピーカーは、鑑賞のための機材でもありながら触って楽しめるプロダクトとして十分に機能していました。映像の鑑賞とはまた別に身体のコミュニケーションが生まれることも、劇場の新たなかたちとして考えるべきだと思うし、そこには従来のシアター的な没入感とは異なる演出の可能性があります。パッケージ化されたものではなく少しの工夫で劇場は作れることをクリエイター側も再確認でき、短い間のトライアルでも多くの方にその可能性を感じてもらえたのではないかと思っています。

まだまだ言語化できていないことも多く、課題は多く残されていますが、また皆さんのもとに訪れるべくアップグレードを重ねていきたいです。

## 劇場はどこにあるか

文=渡辺瑞帆

「劇場をつくるラボ」は、通底して複層的に「Theater」と「AI」を考え直していく道のりでした。

作品がオンラインを介して鑑賞者に届くまでは、いくつかのデバイスに媒介されます。

作品▶プラットフォーム▶パソコンやタブレット▶音声出力、画面出力

当初は、プラットフォームであるオンライン型の劇場 [Theatre for AI] を、福祉施設に最適化した形でリアルな空間にアウトプットして、さらに従来の劇場が持つ機能（人が集まる・ワクワクさせる・余韻が残るなど）を付加しながら、個別の最適解も探る、ということを考えていたように思います。さまざまなデバイス（タブレット、ヘッドホン、スピーカー等）を揃え、それらを固定する機構をつくり、実験を重ねながらセットを開発し、全国の福祉施設に届けることを目標に据えました。

しかし、いざ福祉施設に持ち込んだ際に、これは慢心した態度だったと反省しました。前提が他者に寄り添っておらず、一方的な「こうやって見てほしい」という思いが強すぎたのだと思います。デバイスや機構を複数用意するほどバリアが増え、またそれを越えるための人手が必要になります。それぞれの福祉施設、利用者さんによっても、個別の事情はさまざまです。

ですが、だからこそ、人と人、人と物を媒介するコミュニケーションをデザインしていくこと、そのプロセス自体が劇場を立ち上げる仕組みになるのではないか？という問い合わせされました。まず物を揃えたことは、スタートラインに立ったことにすぎませんでした。

思えば、作品がオンラインを介して鑑賞者に届くまでは、たくさん的人に媒介されます。

アーティスト▶プラットフォーマー▶劇つくクリエーターチーム▶福祉施設のスタッフさん▶福祉施設の利用者の皆さん

劇場をつくるラボの取り組みは、クリエーターチームと各福祉施設の窓口となってきた方とのやりとりが活動の大半です。クリエーターチームとしてはどれだけ福祉施設のリアルな状況を聞き出せるか、作品や鑑賞のことを伝えられるかがミッションの要でした。その過程で、「作品をみんなで手分けして全部観よう」「お薦め作品パンフレットを作ろう」「決め切ってからまとめてを送るのではなくて、まずデバイスと作品に慣れてもらうためのお試しキットを送ろう」というアイデアを実践して、ある程度の進行方法が確立してきました。各施設さんからも、個別の事象から試してみたいことの提案をいただけるようになっていったように思います。そして、各施設合同の振り返り会を経て、改めて「劇場とは何か」という問いに回帰してきました。共有している感覚は多いけれど、きっとそれぞれ認識が異なる部分があるはずなので、そこを認識し合うことによって、もう少しで、デバイスなのか仕組みなのか、 “何か” を開発できるような予感がしています。ラボとしてインタラクティブにアイデアと実践を繰り返しながら効果をアーカイブしていく、その活動は今後もぜひ続けていきたいです。

## まずよく見ることから 劇場はつくられる

文=山川陸

とにかく具体的で、何ひとつも取りこぼせない。

「劇場をつくるラボ」のはじまる以前、はじめてたんぽぽの家とやまなみ工房を見学したとき、スタッフの方から聞く話に強く感じたことです。私たちが経験することに具体的でないことなど何ひとつありませんが、それらを具体的なまま考えたり話したりすることはとても難しいことです。この聞き方はナンセンスだと思いながらも一応、「〇〇なことは多いんですか?」と一般にイメージされそうなことを聞いてしまうこともありました。

こういった質問をしてしまう度、スタッフの方はこういった利用者さんがいてね、と個別のエピソードを教えてくれます。「アニメのオープニングを繰り返し見ていて」「アイドルのライブが好きで」といった話を聞くことは多いので、映像作品のコンテンツだけ取り出して考えると、利用者さんたちのなかに一定の傾向があると考えることができます。

しかし映像作品は、いつ観るのか、どう観るのか、といった鑑賞のしかたにこそ、一人ひとりの違いが現れます。その違いのディテールをよく観察することで、その人の物の見方や人との関わり方が現れていることもあります。鑑賞という行為が、創作と同じくらいその人を知ることにつながるというのは、本プロジェクトを通じて確認できた重要なポイントです。

たとえば、ビーポで出会った利用者さんは、普段からタブレットを使って鉄道の走る映像を観ていたそうです。横になる場所は、決まって人通りの多い部屋と部屋の境目になる扉の近く。ネックピロースピーカーや丸太スピーカーに興味を持ってくれて、いつも

の映像をそれらで観ていたそうですが、彼にとってはどうやら映像以上に音が大事なのだとわかつきました。横になるとき痛くないようにと渡す座布団を、タブレット置きに使って自分は床に頭を当てているという話も、もしかすると人の歩く音や振動を感じたくてしている行為なのかもしれません。

これまでのトライアルを通じて、はじめてこんなことを話してくれた、こんなことをしていたんだとはじめて気がついた、というお話をスタッフさんからたくさん聞きました。相手がどんな人であれ、他人のことは推し量るしかないけれど、ものを介した具体的なやり取りはときに言葉でのやり取り以上に多くのことを伝えてくれます。

だから、創作活動と同じくらい鑑賞にも価値があるのだと、この1年を通じてより強く思っています。

アート作品は誰にとっても未知だと思えることから、利用者さんとスタッフさんに垣根なく存在するもののひとつです。情報の選択肢は多い方がいいと私たちは信じていますし、作品を鑑賞した上で、いま好きなものがより好きになるための経験になってよいのです。

この活動は課題を解決するサービスでも、作品ができあがるワークショップやクリエイションでもありません。目の前の人のことをよく知り、考えることで、結果的にみんなのいる場所が過ごしやすくなっていく。そういったアクションの1歩目に位置付けられる活動なのではないでしょうか。

## THEATRE for ALLとは

THEATRE for ALLとは



URL 1

THEATRE for ALL (シアター・フォー・オール)は、文字通り「みんなの劇場」を目指す、2021年2月にスタートしたバリアフリーなオンライン劇場です。車椅子を利用している人、寝たきりの人、子育てや介護で出かけにくい人、視覚聴覚に障害のある人、日本語が母語でない人、劇場から遠くに住んでいる人、など様々な理由で映画や舞台芸術の鑑賞が難しい状況に対して、アクセシビリティ = 回路を切り開きたい、という思いでサービスを運営しています。

これまでに演劇・ダンス・映画・メディア芸術などの作品を中心に、日本語字幕、音声ガイド、手話通訳、多言語対応などのアクセシビリティに対応した作品、約80作をインターネット配信しながら、オンラインやリアルでのワークショップ、様々な当事者の方々が集うインクルーシブな上映会イベント、アート×アクセシビリティのコーディネート事業などを行っています。

URL 1 —— <https://theatreforall.net/>

劇場をつくるラボについて



URL 2

私たちはオンラインの劇場として映像作品を日々配信していますが、実際様々な障害当事者の視聴者にどのように鑑賞されているのか、また、そもそも視聴にあたってどのような障害が発生しているのかを知る必要があると考え、「劇場をつくるラボ」を始動しました。



URL 3

再生機材のユーザビリティ、生活の中での鑑賞時間の作り方、作品の内容そのもの、情報保障のあり方、コミュニケーション、など様々な視点で検証しながら、日本全国の福祉施設や当事者コミュニティの方々と共に、実験を行います。

初年度は建築家の山川陸氏をディレクターに迎え、主にセノグラフィーの視点から検証を重ねることから当事業はスタートいたしました。次年度は今回の成果や発見を元に、創作段階から当事者の鑑賞を視野に入れた作品作りに挑戦し、より多くの施設を巡回することを目標としております。これからも当事業を応援をいただければ幸甚です。

当事業やTHEATRE for ALL のご支援はこちらから

URL 2 —— <https://theatreforall.net/support/>

ご意見・ご感想・ご質問などはこちらから

URL 3 —— <https://theatreforall.net/contact/>

# 劇場をつくるラボ クレジット

## プロジェクトメンバー

THEATRE for ALL LAB  
ディレクター  
 山川陸(一般社団法人DRIFTERS INTERNATIONAL アソシエイツ)  
クリエイターチーム  
 板坂留五・梅原徹・渡辺瑞帆

## トライアル実施パートナー

社会福祉法人わたぼうしの会 たんぽぽの家  
 | 佐藤拓道

一般財団法人たんぽぽの家  
 | 中島香織・大井卓也

生活介護事業所 ぬか つくるとこ  
 | 丹正和臣・湯月洋志

社会福祉法人 愛成会  
 | 青木信(指定障害者支援施設メイブルガーデン)・玉村明日香

やまなみ工房  
 | 小西康文・桐葉朋子・桐葉昌大

社会福祉法人 安積愛育園  
 | 小林竜也(はじめの美術館)・折笠弘海、佐藤雅俊(多機能支援センター ピーボ)

## 報告書

編集  
 春口滉平(山をおりる)  
デザイン  
 綱島卓也(山をおりる)

## 企画・制作

株式会社precog (THEATRE for ALL事務局)  
プロデューサー  
 金森香  
プロジェクトマネジメント  
 兵藤茉衣・林芽生・黒木優花

## 協力

MotionGallery

## 主催

一般社団法人DRIFTERS INTERNATIONAL

~~~~~  
 クラウドファンディングにてご支援いただいた皆様のお名前は
 WEBサイトに記載しております。ご支援ありがとうございました。
<https://theatreforall.net/feature/feature-1944/>

THEATRE for ALL事務局

(2021年4月-2022年3月)

統括プロデューサー

中村茜(株式会社precog)

統括ディレクター

金森香(株式会社precog)

プログラム制作

制作統括
 兵藤茉衣(株式会社precog)

制作・コミュニティ運営
 小林あずさ(株式会社precog)

制作・管理
 林芽生(株式会社precog)

制作アシスタント
 西多恵子(株式会社precog)

バリアフリー制作マネジメント
 谷津有佳(株式会社precog)

企画協力
 山上庄子(Palabra株式会社)、大高健志(株式会社MotionGallery)

ラーニング事業

ワークショップデザイン
 栗田結夏(株式会社precog)

プログラムマネジメント
 山本さくら、星茉里

劇場をつくるラボ

ディレクション
 山川陸(一般社団法人DRIFTERS INTERNATIONAL)

クリエイターチーム
 板坂留五、梅原徹、渡辺瑞帆

プロジェクトマネジメント
 黒木優花(株式会社precog)

広報・コミュニケーション

マネジメントリーダー
 小仲やすえ(株式会社precog)

マネジメント
 関萌美(株式会社precog)、宮崎淳子
 箕浦萌、長谷川葵(以上、株式会社precog)

コミュニケーション企画協力
 篠田栄

WEB運営・保守

マネジメント
小野寺研斗(株式会社precog)

制作・保守
廣瀬絢、佐野譲(以上、株式会社おいかぜ)

法務ディレクション

水野祐、高橋治(シティライツ法律事務所)

アクセシビリティ監修

伊敷政英(サニーバンクアドバイザー)、
岡上洋子(株式会社メジャメント、サニーバンク運営事務局)、
サニーバンクのワーカーのみなさん

アートディレクション

オフィシャルデザイン
いすたえこ

デザイン
山口知香

イラストレーション
渡辺明日香·Akari

アドミニストレーション

マネジメント
森田結香(株式会社precog)

デスクアシスタント
岩井美菜子、河野真紀、齊藤浩子(以上、株式会社precog)

by THEATRE for ALL LAB

